HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	政治認識としての帝国主義論　－ホブソン、レーニンの帝国主義論の再検討－（一）
Author(s)	中村, 研一
Citation	北大法学論集, 40(5-6下), 1053-1090
Issue Date	1990-09-17
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/16732
Type	bulletin (article)
File Information	40(5-6)2_p1053-1090.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

政治認識としての帝国主義論（一）

――ホブソン、レーニンの帝国主義論の再検討――

中村研一

目次

まえがき
第一章　帝国主義論の再検討
一節　歴史解釈としての帝国主義論
二節　帝国主義概念の意味範囲
三節　帝国主義論の二つの魂（以上本号）

まえがき

小論の目的は、J・A・ホブソン『帝国主義論』(John A. Hobson, *Imperialism : A Study*, 1902) 及び、V・I・レーニン『帝国主義』(Vladimir I. Lenin, *Imperialism : The Highest Stage of Capitalism*, 1916) の政治認識を再検討することにある。[1] 即ち、政治状況に対する透徹した認識者であり、同時に政治行動の面で卓越した実践者であった二人の知識人が、それらの著作の執筆時に抬頭しつつあった二十世紀的な世界政治の特質を、いかに認識し、それに対していかなる行為と構想を対置しようとしていたかを、分析することが、ここでの課題となる。

もちろんこの二つの帝国主義論は、主たる分析対象が、ホブソンは南アフリカ戦争、レーニンは第一次世界大戦と異なり、また執筆時期の一四年のずれ（前者は一九〇二年、後者は一九一六年）に応じ、帝国主義の時代区分も食い違う。同時に、両者の現状に対する構造的認識の特徴とその論理構成も同じではない。さらに、成熟した議会制民主主義下で改革を試みた自由主義者ホブソンと、ツァーリの厳しい抑圧体制下で革命を目指したマルクス主義者レーニンとでは、当然に、採用可能な政治的選択肢は大きく異なっていた。その上、一方の著者は異端視された在野のジャーナリスト・研究者であり、他方は亡命中の革命指導者であることから、双方の政治的構想のあり方も後世に及ぼした影響の大きさも、ともに歴然とした相違があったことも否定しえない。

しかしながら、これらの差異をこえて、ホブソンとレーニンの政治認識の間には、強い内的関連性が存在する。それは、レーニンが『帝国主義』の冒頭に「ホブソンの著作は、念入りに利用させてもらった」[2] と表現しているような、分析視角と理論モデルの継承関係に止まらない。その共通性は、二つの著作が長期的な視野に立ち、植民地拡張熱と第一次世界大戦の勃発という世界政治上の最も深刻な危機を「帝国主義」という政治的で論争的な言葉を用いてとらえ、そ

してその主たる要因を、権力が集中していく過程の背後にある政治経済構造から分析しようと試みた点に求められる。両書が、その権力集中の動因を経済要因（ホブソンの「金融業者」、レーニンの「金融資本」）によって説明しようとしたことは周知の通りであるが、さらに二人の政治的知識人は、単なる現状の構造分析に止まることなく、なによりも彼らが摘出した病理や矛盾を転換させていくため、政治構想と変革の戦略を持っていた点で共通する。

この二人の政治思想や政治的文脈の差からすれば、両者の提示した政治的処方箋は、もとより同じではありえない。しかしながら、二十世紀的な世界政治の特質であった強権支配と戦争、そしてそこから脱却という巨視的問題設定は双方に共通するものであり、改革と革命との戦略の落差は、むしろ二十世紀初頭のイギリスとロシアという著者たちが直面させられた権力状況や民主化のレベルに対応するものであったと考えることもできよう。即ち、両者の間の変革戦略の分化を、戦時下においても反戦活動の可能な二世紀の歴史を持った海洋帝国と、仮借ない弾圧が行われる専制的後発的な大陸帝国との間の、軍事化の世界大の不均等発展の帰結ととらえる視点も可能であろう。

以上のようにホブソンとレーニンの帝国主義論は、共通に、世界政治に対する分析的な認識とそれを変革するための主体的な政治構想との双方を持ち、しかもその両者のベクトルの向きを重ね合わせるような問題構成を行っている。しかしながら、従来、帝国主義論が評価される場合には、認識面と実践面が切断され、そのいずれか一方に偏した分析が行われることが少なくなかった。即ち、この二つの著作は、経済学者によって経済理論として研究されるか、あるいは歴史家たちによって、植民地拡大や第一次大戦を分析する際の歴史解釈の枠組として検討されることが多かったのである。そして、政治学者が帝国主義論に触れる場合は、著者たちの伝記の一コマとみなすか、あるいは、著者の政治的実践の一部と解することが通常であった。そのテキストを著者の認識と実践の接合点として解読する作業は必ずしも充分とはいえない。

そこで本稿では、帝国主義論における構造的分析と変革の実践との間に橋わたしをなすような政治認識に焦点を当てる。そして、一章においては、検討のための準備作業として帝国主義論に対する様々な接近法を整理した上で、帝国主義論をこのような政治認識とみなす観点の存在理由を示すことにしたい。そして二、三の各章においては、ホブソンとレーニンとが各々帝国主義論を構想し執筆した際の関心と政治史文脈に立ちかえり、その問題構成と課題意識を再検討する。そして最後に、両者を対比した上で、二十世紀的な世界政治に接近するための政治学的パラダイムとしての帝国主義論の意義と限界を考慮したい。

第一章　帝国主義論の再検討

帝国主義論は多面性をもった著作である。ホブソンの場合もレーニンの場合も、それは、第一に、彼らが直面した歴史的変動を解釈するための枠組であった。そして、第二に、彼らの構造分析の核心は、平明で広い適用可能性を持った経済学的な命題に集約されている。のみならず、著者たちが、問題を再構成し、結論を導き出し、読者に働きかけようとした動機は、極めて政治的であった。従って、帝国主義論は、歴史解釈、経済理論、そして、政治認識の三つの角度から再検討することが可能であり、実際に各々の視点から多くの検討が行われ、評価が下されてきた。帝国主義論に対する言及の総量はすでに厖大であり、しかもその評価が手離しの称賛から全面否定まで、両極端と言ってよいほど対立したものであり、それらを整理して再構成することが一つの問題領域となっている観さえある。ここで、筆者の判断能力の及びえない経済理論上の評価[1]を除くと、帝国主義論の評価の方法としては、およそ次の三つが考えられよう。

(1)　実証主義的評価。帝国主義論を歴史解釈の枠組とみなし、実証分析のテストをくりかえすことにより、歴史的妥

当性を問う方法。

(2) イデオロギー的評価。帝国主義論を著者の目指す変革の実践のための政治テーゼとみなし、それが具体的な政治過程の中で著者の目的実現にどの程度貢献したかを問う方法。

(3) 政治認識的評価。帝国主義論を著者たちが直面した政治的現実に対する問題の提示とみなして、現実と認識との間の相互関係を問う方法。

(1)の実証主義の場合には、帝国主義論の著者が示した理論モデルや分析概念（それらは揺れ動き多面的である）を、評価する側が選択して固定し、実証手続きによって反証可能性を問うわけである。それに対して、(2)のイデオロギー的評価を前提とした場合には、その政治効果が問われることになる。そして、著者たちの著作や概念操作そのものが党派性や政治目的のこめられた組識象徴とみなされ、著者たちの意図と政治的結果とから、組識象徴としての帝国主義論の有効性が評価されることになる。(3)は帝国主義論を政治的な認識作業とみなし、「帝国主義」という鍵概念は、現状認識と問題設定を行うための視角の選択であり、さらに、現状にとってかわる代案を提示するための前提となる認識を嚮導する、という二重の機能をはたすものと考える。本稿では(3)の観点に立ち、次章以降では、そのような方法から二つの帝国主義論の分析を試みるが、本章では、(1)及び(2)の立場から行われてきた帝国主義論の評価を再検討しながら、帝国主義論の全体像に接近する手掛りとすることにしたい。

一節　歴史解釈としての帝国主義論

帝国主義論は後世に大きな影響を及ぼしているが、その理由は複数の要因が重なりあった結果である。後述のように

レーニンの政治的名声や社会主義運動の理論的指導者としての威信は、少なからぬ影響を持ってきた。しかし同じレーニンの厖大な著作のうち『帝国主義』ほど引用され続けてきた書物は他にない。その事情はホブソンについても同様であり、彼の約百冊の著作のうち、刊行後ほぼ恒常的に印刷され続けペーパーバック版などに容易に入手できるものは『帝国主義論』のみである。広汎な人々に知られているという周知性（ポピュラリティー）の基準で見た場合に、帝国主義論は明らかに成功をおさめ、深い影響を及ぼしてきた。その最大の特徴は、なによりも歴史を解釈する枠組を提示している点であり、その解釈が歴史家や歴史教育者によって広く受入れられた点に他ならない。[2] 即ち、列強による植民地獲得とか第一次大戦の勃発といった巨大な歴史現象を先進資本主義国の資本主義の発展と関連させた解釈は、戦間期以降多くの歴史家によって様々に修正されながら受容されていった。資本主義がある発展段階（「帝国主義段階」）に達すると、国内には資本蓄積の機会が乏しくなって海外への資本輸出の圧力が生じ、その資本輸出は政治的軍事的手段をもって推進されるようになるという推論は、極めて平明であって、専門研究者以外にも容易に理解された。また、植民地拡大、関税引き上げ、戦争、軍拡など実に広範囲の歴史的事件にこの定式は適用可能であり、さらに、経済的要因から歴史的変化がひきおこされるという説明は、そのような事態を多くの人々が実感していたために歴史家や一般人をひきつける魅力をそなえていた。そして、無数の歴史研究を嚮導する枠組となり、とりわけ教科書の記述として定着していった。例えば、日本においても教科書の多くは、一八七〇―八〇年を画期として〈帝国主義の時代〉という時代区分を採用しているが、それはホブソンの『帝国主義論』に起源を持つし、また、〈帝国主義戦争〉という第一次大戦の形容の仕方はレーニンが『帝国主義』の中でかちとろうとした論争的な概念を出発点としている。

しかしその反面、帝国主義論の経済決定論的側面をとり出して実証のテストにかけ、その歴史的な妥当性を問う歴史学上の評価を積み上げられてきた。とくに、植民地帝国の凋落が明らかになった一九五〇年代以降、ロビンソン（Ronald

E. Robinson)、ギャラハー (John A. Gallagher)、フィールドハウス (D. K. Fieldhouse) など多数のイギリスの歴史家によって、[3] それまで支配的であったホブソンやレーニンの経済決定論的な歴史解釈の妥当性が否定されてきた。例えば、フィールドハウスはホブソンが定式化した海外投資の増大とその時期に獲得された植民地との関係について、その歴史的妥当性を否定した。彼は「ホブソンは新植民地が投資の大部分をひきつけたのだと恣意的に推測する。……これがホブソン帝国主義論の基本的な誤りなのだ。遠慮せずに言えば、ホブソンは知的手品によって、ない関係をあるかのように見せている。自分の経済理論の本質的な正しさを説得するため、あざやかな手さばきで見る者の目をあざむき、幻影をつくりだす。即ち、二組の統計をさし出して一方が他方の原因であるかのように思い込ませるのだ。[4]」と批判している。このような正確な実証にもとづく反論を行ったのは、ホブソンとレーニンの歴史解釈を党派的観点から攻撃目標としてきた歴史家たちに止まらなかった。例えば、ホブソンの政治的立場に対する明らさまな共感を記したテイラー (A. J. P. Taylor) は、その同じ論文の中で「帝国主義を経済の用語から説明しようとした人々（ホブソンたちを指す――中村）は、合理主義者であった。そのため他人の行動に対して合理的な説明を追求した。もし仮りに当時の資本家や政治家がホブソンやブレイルスファドのように合理的であったとしたなら、彼らは理論通り行動したことであろう。しかし、そのように行動したのは、当然少数のものだけであった。[5]」と述べている。即ち、彼はホブソンがモデルとして抽象した合理的な人間モデルは、その当時の人間行動の主要な局面を正確に反映したものではないと断じているのである。さらに、ホブソン帝国主義論の問題設定を忠実に踏襲し、国際金融業者と投資家によるイギリス政府への圧力活動を実証的に精査したプラット (D. C. M. Platt) は、「金融業者や商社がいかなる影響力を発揮しえたにせよ、その影響はホブソンが『帝国主義論』の中で描いたパターンには全くあてはまるようなものではない。[6]」と結論づけている。

以上の実証主義的な歴史研究によって、たしかにホブソン『帝国主義論』から取り出された経済決定論的仮説は、一

つ一つの具体的なケースに則して反証された。個別的な事例研究によって、理論的な命題が次々と否定されてきた意味は少なくない。しかし、個別的な事例に対するモノグラフ的な研究の積重ねのみによってただちに歴史解釈の理論的な枠組が崩壊するとはかぎらない。なぜなら、個別研究と理論枠組とは、論述の次元と抽象度の高さとが、ともに異なるからである。ここで資本輸出と植民地拡大との関連を問うた帝国主義論の命題の魅力の一つは、抽象レベルの高さ、即ち、適用可能な事例の広さにあることを思いおこす必要がある。実に多くの歴史的事例が、この命題の妥当性の検討を端緒として研究を進めることができたし、さらに未だ検討されていないが、この命題があてはまる可能性をもった歴史事例はほとんど無数に存在する。とすると、一つの反証を提示してもそれだけでは理論仮説の存在意義を否定することにならず、反証となる実証研究が広範囲にわたって積上げられてはじめて、理論モデルの信頼性を動揺させることができるのである。さらに重要なことには、個別研究の蓄積によって帝国主義論の歴史研究上の有用性を否定することはできるとしても、それだけではそれにとってかわる抽象度の高い嚮導的な理論が構築できるわけではない。ホブソン帝国主義論を最大の攻撃目標として、経済史の手法により厖大な実証的な植民地史研究を行ってきたフィールドハウスが「資本主義的な帝国主義論を歴史家の蓄積から消去したところで、残されるものは理論的空白である[7]」と述べたことは、実証的なモノグラフ的研究の蓄積だけでは、歴史解釈の転換に及ぼす影響に大きな限界があることを物語る。

実証主義的な反証作業の半面をなすのが、著名なギャラハーとロビンソンの二人の歴史家に主導された歴史解釈の転換である。それはホブソンらが当然のこととみなした諸前提に対する全面的な挑戦であり、そのうちでも歴史解釈にとって画期的であったのは次の二点である。第一は時代区分の問題である。ギャラハーとロビンソンは、一八七〇―八〇年代を境としてそれ以前の「自由貿易の時代」から「帝国主義の時代」に転換するという広く受入れられた時代観を、イギリス帝国史の文脈の中で否定した。植民統治という法的形態を伴った「公的支配」のみならず、植民地化しない諸地

域への経済的優越性の確立という「非公式の帝国」を含めてイギリスの帝国的進出を考えるとすれば、膨張は一九世紀に一貫して継続してきたという歴史観を、彼らは提示したのである。[8] これは一八七〇―八〇年を転換期とみる歴史観から、その前後を連続的であるとみる歴史解釈への転換である。第二に、二人のケンブリッジ出身の歴史家が、ヨーロッパを中心とした植民地研究の視点を、非ヨーロッパを軸とする視点に転換したことは、極めて重要である。二人の歴史家は、アフリカ分割を研究した長大な著作[9]の中で、アフリカの争奪は、ヨーロッパ側のイニシアチブが引き金になって引きおこされたというよりは、むしろまずエジプトや南アフリカなどにおいて様々な危機が勃発して、それに対するヨーロッパ側の対応として生じたことを体系的に論述した。この内容の検討は小論の目的を超えているが、アジア・アフリカの諸国において独立後、植民地支配の歴史文書が体系的に発掘され、それら植民統治の現場の視点に立つ歴史研究が続々と行われるようになることにより、彼らによる非ヨーロッパ的視点の設定[10]は、補強されてきている。

とすると、植民地拡大の過程に関して帝国主義論から取り出された経済決定論的仮説は、回復不能な失効宣告を受け、その結果ホブソンとレーニンの帝国主義論は過去の遺物となったかのように思われるであろう。実際に英国における植民地史研究の多くは、ギャラハーとロビンソンの歴史解釈を出発点として実証研究を進めており、ホブソンやレーニンの、経済決定論の擁護者は歴史家の中で多くはない。[11] しかし、ギャラハーとロビンソンの研究は、ホブソンとレーニンとが各々の帝国主義論において提示した問題を正面から受止め、その中心的な課題を充分に検討したものといえるであろうか。また、二人の歴史解釈の転換、即ち、一八七〇―八〇年を画期とする時代区分の否定とヨーロッパから非ヨーロッパへの視点の転換とは、ホブソンとレーニンの帝国主義論に、どこまで致命的な打撃をあたえたと考えられるのであろうか。

たしかにホブソンは一九〇二年に書かれた『帝国主義論』において、二人の歴史家が言うように一八七〇年以降三十

年間の植民地拡大を分析している。しかしながら、この時代区分は、レーニンが採用したものではない。[12] またホブソンについてもより詳細に見ていくならば、必ずしも致命的な欠陥とは考えられない。この点をまずレーニンから検討していくことにする。

レーニン『帝国主義』を一読すれば明らかなように、「帝国主義段階」の到来をアフリカ分割の終了後、即ち、一九〇〇年前後と規定しており、一八七〇年から世紀転換期までの三〇年間は帝国主義への移行期と呼んでいる。例えば、Ⅰ章では、「新しい資本主義が古い資本主義と最終的に交替した時期をかなり正確に決定することができる。それは二十世紀の初めにほかならない」[13]と断定し、さらにⅣ章では、「資本輸出が巨大な発展をとげたのは、ようやく二十世紀初めになってのこと」[14]であると述べ、Ⅴ章では、二十世紀になって国際カルテルの形成が「巨大な前進をとげた」[15]と書いている。そして、最終章において「アフリカの10分の9が侵略され（一九〇〇年ごろ）、全世界が分割されつくしたときに、不可避的におとずれたのは植民地の独占的領有の時代であり、したがってまた世界の分割と再分割を目ざすとくに激烈な闘争の時代である」[16]と述べている。また私信の中でも、レーニンは「私は、帝国主義が生れたのは一八九八―一九〇〇年であって、それ以前ではないということを、自分の小冊子のなかで証明しようとつとめました」[17]と記している。即ち、彼は『帝国主義』においても、それ以外の記録でも世紀転換期をもって帝国主義の時代への画期とすることを、一貫して明言しているのである。とすると、一八七〇―八〇年を画期とする時代区分を否定しようとしたギャラハーとロビンソンの歴史解釈の転換は、レーニンに関しては意味をもたない。またレーニンの主要な関心は、一九世紀の最後の三十年間のアフリカ分割の原因ではなく、彼の目前で展開されている第一次世界大戦の動因を分析することであった。このヨーロッパ戦争というレーニンの焦点の当て方からすれば、ギャラハーとロビンソンの非ヨーロッパ的視点への転換は、必ずしも大きな意味を持つものではない。ギャラハーとロビンソンやフィールドハウスの批判は、レーニンの問

題設定に関するかぎりすれ違いに終っている点が少なくないのである。

しかしながら、その歴史家たちの論理はホブソンに関しては考え抜かれた論争を構成している。その具体的な論争点については、次章において検討するが、ここでは一つだけ事前の検討を行っておきたい。それはホブソン『帝国主義論』第一篇の前提となる政治認識の基本的特質である。

「（生産と資本の集中と機械化が進むと一層）製造業者・商人・金融業者たちは、自分たちの経済資源を利益があがるように編成していくことが一層困難になる。従って彼らは遠隔地の未発達な国々を自分たちの個別利益のため、併合や保護国化などの方法によって確保しようとして、各国の政府を利用しようとする誘惑にますます強くとらわれる。

この過程は不可避だなどと言われることがあり、たしかに表面的な調査だけからはそう見える。至る所に過剰生産力、投資を求める過剰資本が出現している。（中略）

この事態の経済条件こそが帝国主義の根抵となしている。しかし、もしその国の一般消費者が、あらゆる生産力の上昇と歩調を合せてその消費水準を高めるとするならば、市場を見出すために帝国主義を利用しようとうるさく騒ぎたてる商品や資本の過剰はなくなるであろう。[18]」

ここに引用した『帝国主義論』の中で最も有名な「帝国主義の経済的根柢」の規定は、前段と後段とで主張の性格が異なっている。そのいずれを重視して解釈すべきであるか。過剰資本の存在が植民地拡大の圧力となるという前段のみを取り出すならば、この命題は広く理解されているように歴史的事実の経済決定論的説明である。しかしここで注目しておくべきなのは、ホブソンの帝国主義論の独創性は、通常理解されているように、イギリス国内の過剰資本の存在と資本輸出の先としての植民地獲得とを、関連付けたところにあるわけではなかった点である。そのような指摘は、ホブソンを待つまでもなく、アダム・スミス（Adam Smith）以降の古典派経済学者やエドワード・ウェイクフィールド

(Edward G. Wikefield) などによって繰返し説かれたところであった。また、資本輸出のために植民地が必要だという主張は、彼が論難しようとした政敵たちを含め当時のイギリスで広く共有された一つの通念であった。ホブソンがこの通念に従って両者の関係を当然の事実とみなし、同書第一篇の中で資本輸出と植民地獲得との間に強い因果関係があるかのような記述をくりかえしているが、これはホブソン自身後になってあまりに経済決定論であったと反省し[19]、また、フィールドハウスやプラットらが批判したように、誤りであった。

しかしながら、ホブソンの主張の特徴は、過剰資本のもたらす病理を強調しながらもその圧力は政策的に解消可能であると切り返した後段にあると考えられる。即ち、この文章はすでに発生した植民地拡大の原因を説明しようとしたものであるよりは、むしろ、現状は変更可能であり、代替となる政策体系が存在することを提示したものと解釈することができる。

『帝国主義論』全体の構成を見るならば、ホブソンが、植民地拡大の要因を経済のみならず極めて多次元的にとらえていた（第二篇の「帝国主義の政治学」に第一篇「帝国主義の経済学」の約三倍の紙数が割当てられている）ことは明らかであろう。また、植民地拡大の「経済的根柢」である過剰資本の存在も、それが実際の植民地拡張に結びつくか否かは、国内世論の動向やイデオロギー状況などに大きく左右され、さらに最終的な決定は指導者の政策判断と意志によることを、ホブソンは重視していた。そして、たとえ帝国主義の「経済的根柢」が存続したままであっても、政治による政策の変更を通じた改革によって植民地拡大を阻止しうると考えていた点からすれば、彼の基本的認識は経済決定論とは正反対である。とすると、資本輸出と植民地獲得との間の経済決定論的な因果関係が否定されたことによって、ただちにホブソンの体系的論述全体の意味が否定されるわけではない。

ホブソン帝国主義論の独創的な貢献は、彼に先行する多くの自由貿易主義者たちが、植民地の頒有がイギリス国内の

社会的経済的不平等をもたらしていると論じてきたのに対して、その論理関係の矢印を逆転させて、国内の不平等が市場と投資の機会を求めてくりひろげられる国際的闘争の一因となっていると論じた点にある。そして、さらにそのような帝国主義的進出の圧力となるような要因を除去することが国内政策の転換によって可能であることを、代替構想を含めて提示して見せたのであった。『帝国主義論』以前のホブソンの帝国主義批判の論述を順次に追ってゆくと、長らくコブデン流の自由貿易主義を提唱していた彼が、飛躍をとげるのは、一八九八年八月の「自由貿易と外交政策」という『コンテンポラリ・レヴュー』（*Contemporary Review*）の論文が出発点である。この中でホブソンは次の様に述べた。

「海外市場をめぐる闘争は、厖大な軍備を必要としているが、これは諸国家間の普通の商品の交換から生じたものではない。そうではなくて世界の発展した工業国家の国内市場が不自然で拙劣に圧縮させられている結果なのだ。[20]」

即ち、従来の海外植民地の確保・拡大は国内の支配層の特権の擁護につながるという論理の矢印を逆転させ、国内の不平等そのものが帝国的膨張など様々の病理の根源であるという視点の転換をなしとげたのである。そして、その結果、現状のまま海外膨張を続けるのか、それとも国内改革を行うのか、二者択一の選択肢を提示する。

「一言でいえば、争点は市場と領土の対外的発展であるのか、それとも国内の社会的経済的改革であるのか、という選択である。[21]」

このような認識が、先に引用した一九〇二年の『帝国主義論』の「帝国主義の経済的根柢」の後段に結実したと考えられる。

以上から、先の引用前段の経済学的命題は、後段の彼の代替構想を提示するための準備となる現状規定であったと解釈することができる。ホブソンは資本輸出と植民地獲得の関係について当時の通念に依拠した部分について誤りをおかした。しかし、彼は政策的選択によって経済構造は変えられると考えており、また彼の認識全体は政治、イデオロギー

にわたる多次元的なものであり、経済決定論を採った誤りによって全面的に意義を失うとは考えられない。さらに、彼の提示しようとした代替構想は、長期的に見て重要な政治的意義を持つと考えられる。

さらにここでもう一つ注目しておくべき点は、ホブソンにおける認識の転換が一八九八年―一九〇二年に生じている事実である。これはレーニンの一九〇〇年前後という時代区分と一致する。もしもホブソンを過去の歴史の解釈者とみなすとするならば、「便宜上一八七〇年を、帝国主義の意識的政策の開始を示す時期とみなした」[22]という彼の時代区分は批判の対象として重要かもしれない。しかし、彼を帝国主義の同時代に生きた政治的知識人とみなすならば、彼の認識の転換が一八九八年以降の数年間で生じた事実の方が、彼の採用した時代区分よりはるかに大きな重要性を持っているはずである。してみると、一九世紀中葉と後半とを連続したものとみなすギャラハーとロビンソンの時代区分は、ホブソンが一九〇〇年前後になしとげた認識の転換に対して、正面からの挑戦となっているとは考えられない。さらに、ホブソンが最大の関心をはらった場はイギリス国内であり、帝国の中心であるロンドンにおいて何をなすべきかを問いかけている。それに対して、ロビンソンらの非ヨーロッパに焦点を当てた歴史解釈の枠組は、帝国中央における変革の可能性を視野の外に置いている。もし仮りにイギリス国内でイニシアチブが発揮され改革と平等化が達成されたとするならば、帝国主義的膨脹の圧力はなくなるというホブソンの主張は、ギャラハーとロビンソンの提唱した非ヨーロッパに軸を置いた実証研究とは別個に検討されるべき課題として残されている。

してみると、政治認識の観点からホブソンとレーニンの帝国主義論を再検討することは、歴史家の実証研究の意義を否定するものではなく、むしろ、それらと異なる観点に立ってそれらを補完するものであることは、明らかであろう。

二節　帝国主義概念の意味範囲

帝国主義論の鍵概念である「帝国主義」という言葉は、たえず広い意味範囲と複雑なニュアンスを持ち続けてきた。この概念が用いられた歴史的文脈の中で、どのような意味を持っていたかを再検討しておくことは、帝国主義論の高度な政治性を考えるうえで不可欠である。

第二次大戦後においても「帝国主義」という象徴は、一方で政治用語であり、他方で社会科学上の概念である。前者の使用例としては、「帝国主義（インペリアリズム）」及び、「帝国主義者（インペリアリスト）」という言葉は、戦後世界においてはもっぱら強国が中小国など弱者に対し干渉・抑圧・搾取しようとする際、強者の側を非難する政治的レッテルとして用いられる。後者の例としては、『マルクス主義思想事典』によれば、同じ「帝国主義」は「金融資本の時代における世界大の規模で行われる資本蓄積の過程」[23]と定義される。前者の日常の政治用法には、明らかに後者の社会科学的概念の俗流化した用法が部分的に反映しているし、また、後者のような社会科学的概念は、前者の流動する日常の言葉の意味範囲の一部分をすくい取って鋳造されたものである。そして日常言語の宿命としてその両者の意味範囲は相互に浸透し、共鳴しあう。特に「帝国主義」のように、社会科学の用語になった概念自身がより高次の論争的意味あいを負っている時には、学術的定義と政治的用法との混同は避け難い。後に見るように、ホブソン『帝国主義論』における「帝国主義」という言葉の用法はかなりの程度揺れを示しており、同じ言葉で異なる内容を指すことさえ希でない。またレーニンの有名な五つの標識による「帝国主義」の規定の仕方は、あまりに包括的であり概念を操作化（オペレーショナライズ）するには適さない。[24] しかし、その言葉の機動性と包括性は、レーニンがしばしば用いる表現を借りれば、「死んだ抽象」ではなく「生きた現実」を映し出す器としては、極めて有効であった。しかし、その反面で言葉の多義性が混乱をもたらすことも避けられない。例えば、イギリスの実証主

義的な植民地史家ハンコック（W. H. Hancock）は「その言葉（帝国主義を指す。中村）の喚起する感情のこだまは、あまりに暴力的で矛盾に満ちている。それは決して正確な意味を伝達することがない[25]」と述べ、実証史家は、「帝国主義」という概念を歴史分析に用いるべきでない、と断じている。このハンコックの言葉は、現実政治の文脈の中でたえず新たな意味を採り込んでいく帝国主義概念の生命力が、認識のための概念としては厳密な確定性を欠く源となっていることを裏側から物語っている。

さらに、政治用語としての「帝国主義」自身もまた、意味範囲を定めることが容易でない。そこで、まず、二十世紀初頭にホブソンとレーニンとが、社会科学の概念として鋳造する際に前提とした「帝国主義」という言葉の政治的な意味範囲を、見定める作業が不可欠になる。そこで「帝国主義」という言葉の歴史を詳細に検討したコフナーとシュミット（Richard Koebner and H. D. Schmidt）の研究[26]に主としてよりながら、一九世紀における批判概念としての「帝国主義」の変遷を要約しておこう。

この言葉が政治用語として用いられたのは、一八三〇年代のフランスにおいて、近代ヨーロッパにおける〈帝国（エンパイア）〉イメージの集約点であったナポレオンⅠ世の帝国（最強の絶対王政ブルボン王朝を打倒し、神聖ローマ帝国の権威を継承し、ヨーロッパの全域支配を試みた）の復活という野望を持つ政治集団に対して、「帝国主義者（インペリアリスト）」という呼称があたえられたことが出発点となっている。そして、ナポレオンⅢ世は、一時期ナポレオン帝国の栄光と版図の復活を強調し、大ボナパルトの記憶に引照しながらフランスにおける自らの支配の正統化を試みた。そのようなナポレオンⅢ世の野心・専制志向・植民地拡張政策などを批判ないし警戒する用語として「帝国主義」は英仏の自由主義者の間に定着した[27]。さらにイギリスでは、やがて「帝国主義」が指す対象は、外的脅威であるであったフランスやナポレオン帝国、あるいはナポレオンⅢ世という具体的な個人から離れて一般化していった。そしてイギリス国内の政治現象に関しても、対外的

には「帝国」の栄光と権力を誇示し、対内的には大衆の排外的な愛国主義にアッピールしようとする、政治指導のスタイル一般を示すようになった。ここに「帝国主義」とは「帝国」の栄光と拡大をめざす政策（植民地拡大、専制的な権力誇示）とそのような政策を推進する政治指導という〈リーダーシップとしての帝国主義〉を意味するに至る。[28]

一八三〇年代から七〇年代にかけてこの政治用語がコブデン（Richard Cobden）らの自由主義者によって用いられるときには、次の様な批判的な観点からのものであった点に注目しておく必要がある。[29] まず「帝国主義」とは、ナポレオンⅢ世によるナポレオン帝国の栄光への回顧にせよ、ディズレイリー（Benjamin Disraeli）のイニシアチブによるヴィクトリア女王のインド女帝就任にせよ、過去志向的な権威主義の復活とみなされた。旧支配層の特権や復権と結びついたこのような軍事力や栄光の誇示は、自由貿易主義を掲げ、合理的な世論の判断力に信頼をよせる自由主義的世界観からすれば、前世紀から継承した負の遺産にすぎず、時代の進歩とともに消え去るべきものと考えられていたのである。さらに、この過去志向的な威信と栄光を人々に喚起させる帝国主義的リーダーシップのアキレス腱を、自由主義たちは帝国の過去そのものの中、即ち様々な帝国が病理を露呈しながら崩壊していった歴史の中に見出した。過去の栄光に依拠して現在の帝国を正統化できるのと全く同様に、「ローマ帝国の崩壊」のような経験に引照すれば、過去に否定された帝国の負の側面を人々に想起させることが可能になり、帝国主義的リーダーシップを批判することができるからである。実際、一八世紀後半から一九世紀前半の歴史の中には、北米一三州の独立、スペイン領アメリカの独立、カナダにおける紛争の統発など、アメリカ大陸を主舞台として植民地帝国を過去の遺物として描き出すのに適切な事例が少なくなかった。[30] そのため、「帝国主義」とは、過去の〈帝国の没落〉イメージをモチーフとしながら、現在の政権の病理的側面を批判する用語として、自由主義者たち、とりわけイギリスとフランスの知識人の間に定着したのは当然であった。

ところが一九世紀末葉に至ると、イギリスやフランスでは「帝国主義」の担い手は、従来の様に支配層に止まりえず

中産階級に拡大し、さらに社会の底辺にまで及ぶようになった。また帝国の栄光と権威など過去志向的なレトリックとともに、市場や資本の投資先など現在乃至未来志向的な利益の次元で帝国が論じられる機会が多くなっていった。そして、植民地拡大の対象地域も、旧来のアメリカから、アジアやアフリカ内陸部に転換した。イギリス史の文脈では、この一九世紀後半の政治気候の変化を過去のそれと区別して「新帝国主義」と呼ぶのはそのためである。[31] 一八七〇年代以降のイギリスにおいてとりわけ注目されたのは、「大衆新聞（イエロー・ペイパーズ）」の人種主義や排外主義の論調に象徴的に示されるように、支配層の「帝国」に対する執着に止まらず、大衆の中により攻撃的な好戦熱や植民地拡張熱が姿を見せはじめた点である。その典型例は、露土戦争の際にイギリスで流行した反ロシア熱を翻り立てる歌のかけ声「ヘイ、ジンゴー！」に由来する「ジンゴイズム」(Jingoism) と呼ばれる排外熱である。そして、露土戦争や南アフリカ戦争などの機会には好戦的な排外主義は政治化して世論の一角を占め、英国政府の政策を制約する一つの要因となった。これは自由主義たちにとって、旧来の「帝国主義」の特徴とみなしてきた専制支配とその延長上に位置する支配層の特権擁護と関連させて説明することは不可能な、新しい現象であった。即ち、民主制のもとで大衆の政治参加と平行して帝国の拡張が行われる際に生じた新しいものであった。これもまた「帝国主義」と呼ばれるようになる。ホブソンは、しばしば「ジンゴイズム」と同じ意味で「帝国主義」と言葉を用いているが、この頃には、大衆とエリートを横断する、〈政治的気候としての帝国主義〉という新たな意味の次元が生まれたと考えられる。[32]

この一九世紀末葉には、先発帝国であるイギリスと、部分的ではあるがフランスにおいても政策レベルの対外膨脹政策（担い手は支配層）と社会心理レベルの対外拡帳熱（担い手は支配層と大衆の両方）とが、平行して生じているという国内政治的な認識が確立した。しかし、それに止らず、その上に今日の「帝国主義」の用法に近い、外交上の争点という意味範囲がヨーロッパ全体で共有されるようになった。植民地争奪競争がコンゴ分割をめぐるベルリン会議（一八

八五年）などでヨーロッパ外交の一大争点となって、「帝国主義」という言葉がアフリカ分割を指すようになり、一九世紀末葉には植民地帝国の隊列へ多くの国家が加わり、そして植民地帝国間の軍事的緊張が増大していった[33]からである。たしかに一八七〇年以前の時代においては、主としてイギリスとフランスが徐々に植民地を拡大し、オランダ、スペイン、ポルトガル、ロシアも植民地を維持していたが、それは第一次大戦前の四〇年間に比較すれば植民地拡大の速度は遅く、なによりフロンティアが消滅していくという意識は乏しく、先占争奪競争の契機は低かった。しかるに、「帝国主義の時代」においては、「アフリカ分割」や「中国分割」に象徴されるように、併合と植民地化は急速に進められ、政治的独立を失なう国々が続出していった。そして、ドイツ、イタリア、ベルギー、米国、日本がほぼ一斉に植民地帝国の隊列に加わって緊張を高めたのである。そして植民地諸帝国が四年に及ぶ第一次世界大戦を戦うに至った。

そして、このような新たな変動をつくり出す要因について、様々な検討が、イギリスの自由主義者によってもドイツやオーストリアなどのマルクス主義者によっても行われるに至った。イギリスでは加速化された植民地拡帳熱は、しばしば「ケープからカイロまで」とか「宇宙の果までの併合」などという誇大妄想的でスローガンのもとに展開されるなど、一つの併合が次の拡帳の挑躍台になるという〈無限膨脹〉的なモチーフさえ生れた。それに対して自由貿易を掲げる自由主義者の一部は、その非合理さを批判し続けた。例えば、ホブソンは、後述するように、政治の舞台裏に隠れながら、陰で植民地拡帳を推進する力があるのではないか、という仮説にもとづいて南アフリカ戦争の政治過程を検討した。そして植民地進出の推進と英本国における植民地拡帳熱の煽動との接点に立ち、南アフリカと本国の動向を結びつけ対外膨脹の方向を決定づける司令部の役割をはたすものは、「金融業者（ファイナンス）」と「投資関連業者（インベスター）」であると主張した。かれらはホブソンによって、一方でコスモポリタン的な性格を持っており国内の過剰資本の投資先を海外に求め、他方で国内の「大衆新聞（イエロー・ペーパー）」を支配し世論を操作するものとして特徴付けられ、社会的、職業的に特定可能な具体性を持った組織

とみなされた。[34] この「金融業者（ファイナンス）」は、本国の民主政の枠の内部で動き、資本主義の一部分をなしている組織である点から、これを〈組織としての帝国主義〉の次元と呼ぶことができよう。

さてここで、これまで見てきたホブソンなどイギリス自由主義者による帝国主義の政治的意味範囲とドイツのマルクス主義者の用法とは、かなり食い違う点に注目しなければならない。最強の社会民主党と指導的マルクス主義者を多数擁し、急速な経済発展をなしとげつつあったドイツは、植民地帝国の形成においてなお後発的な位置を占めていたからである。イギリスを筆頭とする先発帝国は、一九世紀末までにすでに二世紀以上の海外植民地領有の歴史を体験していた。イギリスはフランス・スペイン・ポルトガル・オランダなどとともに、移住植民地、異民族支配、戦略拠点の争奪などを経験していただけでなく、独立運動や植民地反乱などに悩まされ、植民地問題は本国の政界において具体的な政治争点となる事が希でなかった。とくにイギリスにおいては、植民地在住の行政官・移植者・ジャーナリスト・聖職者が本国の政界に政治的要求を反映させるチャネルが確立されていた。従って、ここでは「帝国」とは植民地と関連するものと広く観念されたのである。ところがドイツは一八八〇年代にようやく海外植民地の領有を開始したのであり、しかもその時点での海外植民地のドイツ政治に占める比重は、極めて小さかった。即ち、ドイツは、植民地帝国としては、米国や日本、あるいはヨーロッパ内ではベルギーやイタリーとならぶ後発国であった。従って、先発帝国において「帝国主義」という言葉が、「植民地帝国」としての歴史的な意味を背負い、海外の異民族支配と関連した具体的政治事象と意識され続けたのに対し、アジア・アフリカの「植民地帝国」という意味あいはドイツでは、多くの場合、一九世紀末の時点で未だ他所事であり、即ち、イギリスなど先進帝国が自己の植民地拡張の真の動機を覆い隠すためのイデオロギーとみなされた。[35] また、ドイツにおいて自国を対象として「帝国主義」という言葉が用いられる際には、ドイツ帝国の国家目標の力による達成とか、あるいは、権力政治や世界政策（ベルト・ポリティーク）一般を指すことが多かった。実際、ドイツの歴史家ヴェー

ラー（Hans-Ulrich Wehler）のビスマルク帝国主義に関する研究によれば、その特徴は、先発帝国の植民地領有に対する反作用であったり、海外の利権確保の願望によって植民地拡大が企てられたというよりはむしろ、急速な経済成長から生ずる不安定を乗り切り、創立間もないドイツ帝国の統治構造に求心力を働かすための政治的技法の一つと分析されている。[36] 同時代のドイツのマルクス主義知識人が「帝国主義」の深刻な検討に入るのは、南アフリカ戦争と義和団事件の鎮圧という二つの血塗られた国際事件を契機としたものであって、カメルーンや西南アフリカなどのドイツ自身の植民地領有に発したものではなかった。このドイツにおける植民地領有に関する歴史的体験と具体性の希薄さとは、下部構造に着目し図式化し普遍化しながら分析をすすめるマルクス主義の伝統とあいまって、知識人たちの関心をドイツにとって最も顕著な現象である資本主義のダイナミズムに向けさせ、それと当時のドイツの軍国主義的・膨脹主義的政策との関連を問題視させることになった。その好例がヒルファディング『金融資本論』である。

オーストリア出身の経済学者ヒルファディング（Rudolf Hilferding）の大著『金融資本論』は、マルスク主義の画期的な著作である。そしてウィーンで経済学を学んだブハーリン（Nikorai I. Bukharin）、さらに、レーニンの帝国主義論に大きな影響を及ぼしたことは良く知られている。しかし、主に一九〇五年のウィーンで書かれた（出版は一九一〇年）この書物の中で、ヒルファーディングは、「金融資本」をもっぱら鍵概念として論旨を展開し、「帝国主義」という言葉は正面から定義していない。[37] そればかりか最終章を除いてその言葉の使用を極力避け、「保護貿易政策」「植民地拡張政策」「金融資本の対外政策」などと個別的に表現している。そしてようやく最終章において、彼は「帝国主義」という言葉を、植民地拡張政策、保護関税政策、あるいは攻撃的対外政策などをもたらす権力の傾向性という当時のドイツにおける一般的用法に則って用いている。このようにヒルファディングが「帝国主義」を分析用語として用いなかったことは、イギリスなど先発帝国で「帝国主義」と呼ばれた植民地拡大をめぐる現象と、彼が経済モデルから導き出し

たドイツの現状との間に大きな落差のあることを、彼が気付いていたことによるであろう。なぜなら、彼の執筆の時点では、海外植民地に関してはドイツの比重は小さく、金融資本の産業資本に対する優越についてはイギリスには適応しえず、両国の関税政策は全く異なり、資本輸出の形態もドイツで主流であった商品輸出のための融資という形態は英仏ではとられていなかったからである。従って、彼はドイツをイギリスと同列に並べて、資本主義の共通の構造変化から両国の植民地拡大を説明することは、全く試みていない。ここでヒルファディングの主たる分析対象となっているものは、産業資本の時代とは異なる金融資本のもとでの資本蓄積の過程の特徴であり、軍国主義的・攻撃的諸政策は彼が経済分析によって説明しようとする第一義的目標ではなく、そこから附随的・傍証的に引照される二義的現象に止まっている。[38] ここでは、ホブソンなどイギリスの論者によって焦点が当てられた海外植民地の獲得は、保護関税政策やアルザス＝ロートリンゲンのようなヨーロッパ内における軍事緊張などと並列してとりあつかわれる一つの現象にすぎないのである。

そして、彼の大書からブハーリンやレーニンが引き出した理論的な命題は、一九世紀末に資本主義はその内在的な力によって基本的な性格を変え産業資本から金融資本に転化したという認識枠組である。[39] これは、生産と資本の集積に向う傾向と資本輸出の必然性とから導かれる演繹的な推論よりなる理論モデルであり、ここでは個々の人間の意図や行為より次元の高い非人格的なメカニズムが想定されていたのである。この抽象度の高いモデルから導き出された新しい資本主義の体制をヒルファディング自身は「帝国主義」と呼んだわけでは決してなかったが、ブハーリンとレーニンとがそれを「帝国主義」と名付け、あるいは帝国主義の標識の一つとしたことによって、「帝国主義」という言葉は新たな意味を加えることになった。即ち経済体制としての帝国主義の次元である。『帝国主義』の執筆のために体系的な研究を開始する以前は、レーニンは「帝国主義」という言葉を、イギリス型の植民地拡大という意味ではなく、ドイツマルクス

主義者の用法である列強間の対立をもたらす軍国主義的膨脹政策に近い意味で用いている。実際、第一次大戦の開戦直後の一九一四年八―九月に書かれた二つの小論[40]において、彼は「帝国主義」という言葉を、明確に規定しないまま用いているが、その論文には海外植民地への言及は一切ない。しかし、それ以降の研究の過程でレーニンはイギリスのホブソンらの自由主義者が採用した帝国主義概念と、ヒルファディングに代表されるドイツマルクス主義の資本主義分析を組合せて体系化した。この両者を架橋する作業を通じて、レーニンの「帝国主義」の定義はヒルファディングの「金融資本」の規定によりさらに抽象度が高まり、包括的なものになっている。『帝国主義』の中で彼は、三章に詳述するように、二十世紀初頭以降の諸現象は、金融資本の時代における世界大の規模で行われる資本蓄積の過程と無政府的な国家間関係との間の矛盾の結果生じているという見方に立ってきた。そして、このような彼の規定によれば、帝国主義は一国の政策でもなくまた、一国の資本主義の発展段階でもなく、先進資本主義諸国とその間の国際政治経済関係とからなるシステムの全体を含む。レーニンは周知のように次の五つの基本的標識に合致するシステムを「帝国主義」と定義している。

「(1) 生産と資本の集積が高度の発展段階に達して、経済生活で決定的役割を演じる独占体をつくりだしたこと。
(2) 銀行資本が産業資本と融合し、この「金融資本」を基礎として金融寡頭制がつくりだされたこと。
(3) 商品輸出と区別される資本輸出が、とくに重要な意義をおびること。
(4) 資本家の国際的独占団体が形成され、世界を分割していくこと。
(5) 最大の資本主義列強による地球の領土的分割が完了したこと。[41]」

このような規定の仕方を一見すれば明らかなように、彼が「帝国主義」と呼ぶものは、特定の組織や制度ではなく、世界大の政治経済制度の総体を指しており、その点から〈世界政治経済システムとしての帝国主義〉の次元と呼ぶこと

ができる。

以上のように「帝国主義」は、政治批判の言葉から出発して抽象的な社会科学の術語にまで意味範囲を拡大させた。そして、その言葉の指す対象も、政治指導者のリーダーシップのスタイルから、政治気候全般に広がり、さらに「金融業者」から「資本主義の最高の段階」にまで包括され、過去に対する回顧的ニュアンスから現在の世界を動かすメカニズムといった意味範囲までを獲得するに至ったのである。

三節　帝国主義論の二つの魂

前節に見たように「帝国主義」は、政治的な論争語であり、そのことを前提にして鋳造された分析概念である。それを鍵概念として組立てられた体系的論述（シーセス）が帝国主義論であった。その二つの代表であるホブソンとレーニンの帝国主義論には、両者の間の様々な相異をこえて、研究と政治という二つのモチーフが並存している。比喩的に表現すれば、一冊の本の中に二つの心臓が脈打っていると形容できよう。

このことのゆえに帝国主義論を、たんに研究書の体裁を整えた著者の政治目的達成のためのパンフレットにすぎないと矮小化することは早計である。なぜならば、それらは著者の研究意欲の結果、書き下された研究書でもあるからである。そして、必ずしも著者とは政治的立場を共有しないような研究者の関心をも触発しつづけてきた。例えば、アメリカの実証主義的な歴史家ランガー（William. L. Langer）は一九三五年にホブソン『帝国主義論』を、「その著作は後の大部分の論議の出発点となったばかりか、多様な学派の大多数の人々にとって、やむことのないインスピレーションの源となってきた[42]」と賛辞を送っている。ここでランガーが「インスピレーション」を強調している点は見逃しえない。

これは単に先行研究の持つ触発力のレベルに止まるものではない。むしろ、ホブソンが帝国主義論で取組んだ課題、即ち、南アフリカ戦争にともなう権力集中と海外膨脹政策はいかにして食止められるかという問題関心が、三十三年後に、形は異なっているものの類似した危機状況（枢軸国の膨脹）に直面させられたランガーにとってアクチュアルな課題として受けとられたことを物語る。即ち、二十世紀初頭の状況に対置した著者の問題構成が戦間期の読者にリアリティーを持って共有された点が、「インスピレーションの源」に他ならない。これは必ずしも読者の著者に対するイデオロギー的共感と同じものではない。著者（ホブソン）は過去の状況に対して問題を構成している。それとは異なる新しい状況の中に置かれた読者（ランガー）も彼自身の問題構成を模索している。ここで「インスピレーション」とは、著作の中に記された問題構成からどこまで読者自身の問題を切り出す際の手掛りを得られるか、という点にかかっているからである。反対の例を示そう。例えばA・J・P・テーラーは一九五六年にホブソンに対するイデオロギー的共感を「（ホブソンは）自分と、同種の人間であり、同様に考え、同様の判断を下している。そのスタイルと道義的価値は称賛する」と公言しながら、なお「権力」ではなく「利益」を基軸として思考しようとしたホブソン『帝国主義論』の有効性（レレバンス）を否定しているのは、イデオロギーの共通性と問題構成の共有との間には距離のあることを物語る。[43]

政治と研究の峻別は、レーニン『帝国主義』の場合には、より困難になるが、しかし、基本的にはホブソンの場合と同様である。レーニンの著作を革命の実践のための正統な教義とみなしたマルクス主義者たちは、戦後の一九六〇・七〇年代まで帝国主義論を、世界大の政治経済変動を分析する最も重要なパラダイムとみなし、そこから社会主義革命へのインスピレーションを得続けた。例えば、ルカーチ（György Lukács）がレーニンの理論と実践を論じた著作の中で、彼の『帝国主義』を評して、「帝国主義のレーニン的把握は……純粋に経済理論として見たばあいには、真に新しいものはあまりふくんでいない」（強調中村）としたうえで、「レーニンの優越性は……帝国主義の経済理論を完全に現代のあ

らゆる政治問題と具体的に結びつけることに成功し、新たな段階の経済学をまさに決定的な状況における具体的行動全体の規準とすることに成功した[44]」（強調原文）と特徴を要約している。このような言葉は、レーニンの帝国主義論の中から研究の側面である経済理論のみを抜きだしたとしてもその価値は高いとは言えないことを正面から認めている。しかし、戦争という破局とそれに伴う流動的な革命状況が継続している状況下においては、革命の達成という政治課題を経済理論と結合して構成したレーニンの著作には高い価値があると評価している。このような視角はマルクス主義者に止まらなかった。イギリスの自由主義的な政治学者ラスキ（Harold Laski）は、ランガーがホブソンを評したのと同じ一九三五年に、レーニンの『帝国主義』に対して「第一次大戦中の経済的帝国主義の性格に関する非凡な研究において、レーニンは世界革命の定式を発見したのであり、そのことによって革命の急迫性を自信をもって予見し始めたのである[45]」と高い評価を下している。ここにおけるラスキの関心は、第一次大戦下のレーニンが『帝国主義』が提示した問題構成と、彼のロシア革命の方針との相互関係であったことは明らかであろう。そして、『帝国主義』執筆から一九年を経たヨーロッパは、やはり戦争と革命の危機が接迫した時代であり、ラスキらの知識人にとって、レーニンの著作は、その手法や政治目標に数多くの異論・留保が存在するにしても、インスピレーションの源となる重要な問題構成であった。ホブソンとランガーとの関係とほぼ同様に、ここでもレーニンとラスキは問題構成の基本的認識を、ほぼ共有していたのである。

さて、ホブソンもレーニンも、ともに政治的実践者であったが、しかしながら二人の帝国主義論の執筆の意図は、しばしば非難をこめて指摘されるような、短期的・直接的な効果を狙った政治的アジテーションではなかった。両者ともに、その著作にはそのような政治主義的効果がありえないことを良く承知していた。そして、政治パンフレットとは区別されるべき、研究書としてのスタイル・データの整理・論証の手続き・意味付けのもとに執筆されている。しかし反

面、それらは事後的な歴史分析でないことはもちろん、今日的な意味での専門研究書でもなかった。そこで著者たちの政治と研究の結合のあり方を見ておくことにする。

ホブソンの『帝国主義論』は、前節に見た様に、それまで政治論争の用語であった「帝国主義」という言葉を、一挙に社会科学の分析用語にまで高めたホブソン壮年期の力作である。そして、彼の一〇〇冊に近い著書の中でも、問題設定のスケールの大きさ、政治、経済、社会心理など様々な側面への目配り、体系的な構成などの各面で秀れ、実証手続もヴェブレン（Thorstein Veblen）による学術誌上の書評の表現によれば、「主題を支持する広汎にして説得的な証拠が列挙されている。」[46]と評価されている。そして、同時代と後世の研究者から研究書とみなされ、批判と検討が加えられてきたのである。ホブソン自身、本の題名（*Imperialism : A Study*）に明示したように、「近代帝国主義という言葉をより正確に規定するための研究書」[47]（序文の冒頭文）と位置付けていた。その執筆を彼は、ジャーナリストとしての時評や報告とは明確に区分していた。同時期にほぼ同じ対象をあつかった『南アフリカの戦争』（一九〇〇年）『ジンゴーイズムの心理学』（一九〇一年）などの書物が、すでに発表した文章をあつめたものであった[48]のに対し、『帝国主義論』は一貫した意図のもとに体系書として書き下されたのである。また一八九八年の『自由貿易と外交政策』以来の一連の植民地に関する論考と、一九〇〇年以降の彼が中心となって進めた南アフリカ戦争への反戦運動の双方に、終止符を打つための総括の書と意味付けられていた。実際、脱稿直後ホブソンはアメリカ旅行に出かけ、それ以降はこの争点への言及は一挙に低下したのである。

しかし、その研究的側面は彼の『帝国主義論』の半面に止まる。同じ序文において「専ら社会病理を批判するための研究であって、その病状が悪性のものであることを包み隠すようなことは一切行っていない」[49]と宣言しているように、各所で彼の改革主義的な政治的立場を隠そうとしていない。本文の中では経済分析をあつかった三倍もの紙数を費して、

帝国主義の政治的側面を論じており、さらに例えば第二篇第二章においては、帝国主義的な海外膨脹や植民地支配に対して擁護の論陣を張った代表的な論者に対して、ホブソンは大きな紙数を使って逐一反論を加えている。[50] それらは、具体的な争点に踏み込んだ政治論争の書であるという性格もあわせ持っていることを示している。しかし、彼が推進した南アフリカ戦争に対する反戦運動が孤立を強いられ、圧倒的な少数派であることを痛感していたホブソンは、彼の筆の力によって、多数派であった彼の論敵たちがあっさりと降伏するとは考えていなかった。それは序文から読みとることができる。即ち、世論の大多数は「政治的な機会主義の潮流に押し流され」、本来なら断固たる論陣を張るべき人々の間でさえ、「目的も持たないような「運命」の圧力の前に屈服する」状況を、彼は前提としていたのである。言いかえれば、ホブソンは、彼の帝国主義批判が短期的な政治的影響力を持たないことを重々承知していた。その上でなお、「知性のある政治的少数者」（強調中村）という極めて限定した読者に向って訴えかけようとした。想定される読み手を「政治的諸力を理解しようと願い、その結果その諸力を統御できるようになるかもしれない」政治的少数派に絞り、彼の新たな問題構成を投げかけたのであった。[51] 即ち、ホブソンの帝国主義論は、単なる帝国主義批判に止まるものではなく、現状の前に無力化させられている対抗勢力が、変革の見通しを得る前提として、厳密な科学的検討を通じて対抗勢力自身の問題設定を再構成していく試みであったのである。彼はそのような形で、現状変革のための問題の再構成と、実証的な研究との結合をはかったのであった。

ホブソンの著述と活動スタイルは、専門研究者とも政治家とも異っていた。後に彼自身「講演、政治論争、ジャーナリズムの執筆が混合した生活は、そうすることを強いられたものであり、秩序立った思考のためにはかなり障害となったが、しかしそれを補ってあまりある非常に価値あるものであった」[52] と回顧している。『帝国主義論』の準備段階で典型的に現われた二つの魂、即ち、一方での南アフリカ現地への取材旅行と帰国後の反戦運動、他方での理論的関心にもと

づく研究書の執筆、この両者を混在させた活動形態こそ、ホブソンの生涯の特徴であり、同時に彼の真髄でもあったのである。

レーニン『帝国主義』においては、この二つの魂の共存はより明瞭である。まず、ロシア革命の前年に執筆されたこの著作の政治性は、ルカーチやラスキの引用が語るように自明のことのように考えられている。たしかに、多くの人々が受入れている帝国主義という言葉の意味あいは、レーニンの名声に負うところが多く、『帝国主義』への関心自体がロシア革命の指導者レーニンを源とすることが少なくない。そして、そこでイメージされるレーニンの姿はなにより、革命の実践家であり、実証的な分析者であるよりは、変革のための政治的理性である。しかしながら、そこから、『帝国主義』を革命戦略のための政治パンフレットであると断じることはあまりに一面的である。

レーニン『帝国主義』を一読したものは誰れも、本文と「序言」（とりわけ「フランス語版およびドイツ語版への序言」）との間のトーンの落差に気付くであろう。一九一六年前半にスイスで書かれた本文は、教科書的構成をとり、抑えられた調子で坦々と叙述され、結論をいそぐことなく体系的に構成されている。それは彼が約半年間連日のようにチューリッヒ州立図書館に通い、本名のウリヤーノフの名で次々と図書や雑誌を請求して貸り出し、二〇冊のノートに四〇〇近い文献からの抜粋をつくった成果である。[53] そのノートの資料収集と草稿から読みとれる手法は、基本的には実証研究者の作業と異なる所はない。『帝国主義』執筆の具体的な契機となったのは一九一六年一月のパールス書店からの執筆依頼であるが、レーニンはそれ以前にすでに資料収集を開始しており、脱稿後も関係資料のノートへの抜粋を続けていた。

他方、その著作の政治性は、革命後の一九二〇年に書かれた「フランス語およびドイツ語版序言」の高揚した調子とあやまりようのない明瞭なメッセージの中に表現されている。革命前の一九一六年に書かれた本文に対する事後の自己解説とも言うべきこの長文の「序言」を、レーニンは「帝国主義はプロレタリアートの社会主義革命の前夜である。こ

のことは一九一七年以来、世界規模で実証されたところである」[54]と結んでいる。この有名な終末＝再生論的なテーゼは、ロシア革命後の時点からふりかえると、革命前に設定したレーニンの革命戦略が、歴史の展開の中で、政治的妥当性を持ったことに対する高らかな勝利の宣言に他ならない。しかも、「序言」の中でレーニンは、本文はツァーリズムの検閲を意識した「イソップの言葉」で書かれたと述べる。たしかに、刊行された『帝国主義』と『帝国主義ノート』に記された同書の構想とを対比すると、表現だけでなく、章別構成などの点でも、構想の段階では目配りされている帝国主義の政治的側面については、本文ではカウツキーに対する非難を除いて削き落されている。[55]それに対してレーニンは革命後の「序言」においては、言おうとして言えなかった政治的含意を読みとるように読者に要請しているのである。

しかし、『帝国主義』本文にこめられた政治性は、より長期的な観点に立った構造分析にもとづくものであり、その内容は「序言」の短いテーゼに集約できるものでは到底ない。ソヴィエト・ロシアの頂点にあって巨大な党と厖大な民衆を指導するレーニンのダイナミックな姿を、『帝国主義』執筆時の彼の上に投影することは、誤りである。と同時に、革命勝利者への立場から書かれた「序言」のみを手掛りに、革命前の著作全体を解釈することは、「イソップの言葉」を鵜呑みにすることと同様、誤解のもととなるであろう。というのは『帝国主義』の本文は、「フランス語版およびドイツ語版の序言」が前提としえたような革命の勝利とは全く異なり、それとは最も遠い状況のもとで構想され執筆されたからである。

なによりも『帝国主義』はレーニンの危機と孤立のもとで書かれた。第一次大戦の発生により、レーニンの組織した革命運動は危機に落ち入った。周知のように、大戦の勃発を予測していなかったレーニンは不意を打たれている。そして、政治的にも彼はオーストリア領ポーランドの革命運動の拠点から中立国スイスに亡命を余儀なくされ、祖国から切り離され、戦時下の他のヨーロッパ諸国の政治的現実からほぼ完全に遮断されることになったのである。戦争のエアポ

ケットのような異境で、レーニンはスイスの社会主義者たちに対する工作は執拗に続けていたが、彼にとって信頼できるのはひと握りの人々に限られ、外界との交信は散発的で、論文などを公刊する機会も乏しかった。[56] のみならず、彼の盟友であるはずの西欧諸国の社会民主党の多数派からも孤立していた。「戦争を内乱に転化せよ」という彼の主張は無視され、彼の「社会排外主義批判」は諸国の社会主義運動の中で敵意を持って迎えられた。一九一四年一一月にレーニンは「現在の危機のもとで、もっとも苦痛なことは、ヨーロッパ社会主義の公認の代表者の大多数にたいして、ブルジョワ民族主義、排外主義が勝利したことである」と記さなければならなかった。ティンメルヴァルトに参集した国際主義者は、トロツキーの表現によれば「四台の馬車に分乗できる」[57] 程の少人数であり、しかも、レーニンの方針に従うものはさらにその中の一部分であったのである。『帝国主義』執筆の背後にあるレーニンの政治心理は、戦争に協力した社会主義者に対する徹底した不信感（カウツキーへの痛罵はその典型）であったことは、容易に理解できる。

革命の実践という面ではスイスの亡命生活は、レーニンにとって強いられた休息期間であった。このような政治的な孤立と社会主義者運動の混迷の中で、レーニンは激しくいら立ち、深い挫折感は抱いていた。[58] レーニン自身、彼の構想する革命の機会が近々やってくるものとは、考えていなかった。二月革命が達成される二カ月ほど前、レーニンは、スイス人青年を聴衆としてドイツ語で一九〇五年革命の意義を回顧しながら論じている。その中で、彼は、戦時下の革命の可能性に関する陰鬱な現状認識を振りはらうかのように、「われわれは、ヨーロッパの現在の墓地のような静けさに欺かれてはならない。ヨーロッパは革命をはらんでいる」（強調中村）と断言しながら、「われわれ老人たちは、おそらく、生きてこのきたるべき革命の決戦を見ることはないであろう」[59] と、革命の見通しをかなり長期的な未来に置いていたのである。

以上の政治的挫折の反面、この大戦中にレーニンは認識方法を成熟させ、戦争をもたらす世界に対する現状認識に大

きな蓄積を築きあげた。『哲学ノート』は前者の、『帝国主義ノート』は後者の成果である。レーニンの生涯には、政治の実践に献身する時期（革命の高揚期）と哲学や経済学の思索に集中する時期（政治的反動期）と間の反復する周期が見られるが、スイスの亡命生活、とりわけ一九一六年のチューリッヒの生活は、明らかに思索期に相当する。[60] また、『帝国主義』に示されたような資本蓄積の過程に関する関心は決して新しいものではないことに注目する必要がある。例えば、一八九七年に未だレーニンというペンネームを持つ以前の若きウリヤーノフがシベリアの受刑地におもむく旅中に執筆した「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」以来、二十年も温めてきた問題意識を発展させたものであると考えられよう。[61] レーニンは自ら進んで研究作業にとりかかり、しかもそれに熱中した。クループスカヤの回想によれば、彼は『帝国主義』執筆について、「好んでその仕事にとりかかった」[62]のであった。そしてレーニンは「たいへんこの仕事に心をひかれ」、帝国主義について彼女に「たいへんおもしろいことをたくさん話した」[63]（強調中村）。ここに見られるものは、研究者の心性である。

世界大戦の発生という現実に立ち遅れ、また社会主義者の中で孤立したレーニンが、そのような立ち遅れと孤立を自覚した上で、社会主義者としての戦争に対する態度を根底から問い直し、社会主義の世界認識を理論化する作業がこの『帝国主義』であったのである。

以上のように、ホブソンの場合もレーニンの場合も、研究者的な認識枠組と実践家としての政治構想とが、どちらか一方に止まることなく、著者の中で結合していた。この二つの魂の結合によってこそ帝国主義論は新たな問題を提示しえたのであり、それが今日に至るまで多くの人々を引きつけた魅力の源泉となっている。

註

まえがき

（1）ホブソン『帝国主義論』のテキストとしては、Hobson, J. A., *Imperialism : A Study* (London, James Nisbet, 1902) に依拠する。そして引用の際は、Hobson, *Imperialism* と略記して頁数を記し、あわせて矢内原忠雄訳『帝国主義論　上　下』（岩波文庫）の該当頁数を〔　〕で表記する。（ただし訳文は変えることがある。）
またレーニンの著作は、『帝国主義』については江口朴郎責任編集『世界の名著52』（中央公論社　一九六六年）収録の和田春樹訳「資本主義の最高の段階としての帝国主義――一般向けの概説――」に依拠して、引用の際はレーニン『帝国主義』和田訳と略記して頁数を記す。それ以外のレーニンの著作は大月版『レーニン全集』（大月書店　一九五四年―一九六一年）の各巻に依頼し『レーニン全集』○巻○頁と略記する。

（2）レーニン『帝国主義』和田訳二七九頁。

第一章

（1）例えば、世界大の資本蓄積の過程にともなう諸問題へのマルクス経済学的分析は、Week, John, *Capital and Exploitation* (Princeton University Press. 1981) に行われており、まだ学説史上の整理は、Brewer, Anthony, *Marxist Theories of Imperialism* (Routledge & Kegan Paul. 1980) になされている。

（2）西欧諸国の場合、歴史家と歴史教育者の社会的比重が日本と比較して格段に高く、同時代の政治的社会的論争が歴史解釈の論争として展開されることに注意を要する。Fieldhouse, D. K., *The Theory of Capitalist Imperialism* (London, Longman 1967) 第三部以降は、経済的帝国主義論が戦間期以後、歴史家によって受容・修正されていく過程を追っている。

（3）「自由貿易帝国主義」や非ヨーロッパを軸とした植民地拡張の解釈など、ロビンソンとギャラハーによって主に提起され、一九六〇年代以降、多くの歴史家をまき込んで展開された論争については、彼らの論文の一部とそれに対するコメントと批判をあつめたLouis, Wm. Roger, *Imperialism : The Robinson and Gallagher Controversy* (New York, New Viewpoints 1976) 参照。

（4）Fieldhouse, D. K., "Imperialism' An Historiographical Revision," *Economic History Rerieu*, 2nd series, Vol, XIV,

No. 2, 1961, pp. 187-209. なお引用は Boulding, K. E., and Mukerjee, T., (eds.), *Economic Imperialism* (Ann Arbor, University of Michigan Press, 1972) pp. 95-123. にリプリントされている同論文からのものである。（同書 一〇〇頁）

(5) Taylor, A. J. P. , *Englishmen and Others* (London, Hamish Hamilton. 1956) p. 79.

(6) Platt, D. C. M., *Finance, Trade, and Politics in British Foreign Policy : 1815-1914* (Oxford, Clarendon Press, 1968) p. 153.

(7) Fieldhouse, *The Theory of Capitalist Imperialism* （註（2）） p. 192.

(8) Gallagher, J., and Robinson, R., "The Imperialism of Free Trade," *Economic History Review,* 2nd series., Vol. Vl, No, 1, pp. 1-15. この二人の歴史家の時代区分の有効性と限界については、マクドナー、プラットらによる批判の中でより精緻化されてきた。これについては 註(3)に掲げた Lowis, *Imperialism : The Robinson and Gallagher Controversy* がほぼ論点をつくしているので、ここでは触れない。

(9) Robinson, R. and Gallagher, J., with Alice Denny, *Africa and the Victorians : The official Mind of Imperialism* (London Macmillan, 1961).

(10) Robinson, R., "Non-European foundations of European imperialism : sketch for a theory of collaboration," in Owen, R., and Sutcliffe, B., (eds.) *Studies in The Theory of Imperialism* (London, Longman, 1972) pp. 117-142. は、このような歴史解釈を理論化したもの。

(11) ホブソンの帝国主義論を擁護した論文として、Mitchell, Harvey, "Hobson Revisited," *Journal of the History of Ideas,* Vol. 26, No. 3, pp. 397-416, Lloyd, Trevor, "Africa and Hobson's Imperialism," *Past & Present,* No. 55, pp. 130-153. がある。またホブソン帝国主義論の政治的意義を明らかにしようとした Porter, Bernard, *Critics of Empire : British Radical Attitudes to Colonialism in Africa, 1895-1914* (London, St Martin's Press, 1968), ホブソンの全体像に迫った未公刊博士論文、Lee, A. J. F., "A Study of the Social and Economic Thought of J. A. Hobson" (Ph. D Thesis, University of London, 1970 unpublished) などがあるが、後二著は、ホブソンの経済決定論を擁護しているわけではない。

(12) ホブソンとレーニンの帝国主義論の相違を強調して、ギャラハーとロビンソンの攻撃はレーニン批判としては的を射てい

ないことを論証した論文としてStokes, Eric, "Late Nineteenth-century Colonial Expansion and the Attack on the Theory of Economic Imperialism: A Case of Mistaken Identity?" *Historical Journal*, Vol. XII No. 2, pp. 285-301 に学ぶところが多い。ただし本稿では、レーニンだけでなくホブソンに対する批判に関しても、ギャラハーとロビンソンによる視点の転換はホブソンの観点を全く無意味にしたものとは言えず、むしろ、ホブソンの本国に焦点をあてた分析とロビンソンらが定式化した非ヨーロッパを軸とした研究とは、一方が他方を否定する性格のものではなく、相補的な関係に立つもの考える。

(13) レーニン『帝国主義』和田訳二九四頁。
(14) レーニン『帝国主義』和田訳三三六頁。
(15) レーニン『帝国主義』和田訳三四一頁。
(16) レーニン『帝国主義』和田訳三九八頁。
(17) 「イネッサ・アルマンドへの手紙」『レーニン全集』三五巻二八〇頁。
(18) Hobson. *Imperialism*, p. 86〔矢内原訳上一三六―七頁〕
(19) 「資本主義こそが不公正な分配、過剰貯蓄、および冒険的帝国生義への経済的衝動の源泉であるとする私の異端的資本主義観を擁護するのに自分の闘争本能の応援を得ることによって、私はしばらくの間、過度の、あまりに素朴な歴史の経済決定論を唱えるようになった。」J・A・ホブソン〔高橋哲雄訳〕『異端の経済学者の告白：ホブソン自伝』（新評論一九八三年）五七頁。(Hobson, J. A., *Confessions of an Economic Heretic: The Autobiography of J. A. Hobson* (Hassocks, Harvester Press, 1976) p. 59.
(20) Hobson, J. A., "Free Trade and Foreign Policy," *Contemporary Review*, 74 (Aug. 1989) p. 179.
(21) (20)に同じ。
(22) Hobson, *Imperialism* p. 19〔矢内原訳上六四頁〕
(23) *A Dictionary of Marxist Thought* (Oxford, Blackwell 1983) p. 223.
(24) レーニンらマルクス主義者の包括的な帝国主義の規定の仕方は、歴史的事実の前に反証する可能性が開かれていないことに対する批判も行われてきた。例えば、シュンペーター（Joseph A, Schumpeter）は「もし（マルクス主義的な）帝国主

義論がたえず正しいものと仮定されてしまうならば、帝国主義論によって問題を「解く」といってみてもそれは、トートロジーにすぎなくなる」と指摘して、その歴史への適応可能性を否定している。Schumpeter, Joseph A., *Capitalism, Socialism and Democracy* (London, George Allen & Unwin, 1976) pp. 52-3, footnote 5.

(25) Hancock, W. K, *Survey of British Commonwealth Affairs,* London, 1940, Vol. II, Part I, p. 1.

(26) Koebner, R., and Schmidt, H, D., *Imperialism : The Story and Significance of a Political Word, 1840-1960* (Cambridge, Cambridge University Press, 1960).

(27) Koebner & Schmidt, *Imperialism* (註(26)) chp. I.

(28) Koebner & Schmidt, *Imperialism* (註(26)) chp. IV. V.

(29) Koebner & Schmidt, *Imperialism* (註(26))chp. III. コブデンについては、MacDonagh, Oliver, "The Anti-Imperialism of Free Trade. "*Economic History Review,* 2nd Ser. Vol. XIV, No.3, pp. 489-501. 参照。一九世紀の古典派経済学者の植民地に対する態度については、Winch, Donald, *Classical, Political Economy and Colonies* (London, G. Bell, 1965)〔杉原四郎・本山美彦訳『古典派政治経済学と植民地』(未来社 一九七五年)〕参照。

(30) ディスレイリーの「帝国とは首にかけられた石臼」という表現は、英領カナダの紛争に関して言われたもの。Stembridge, S. R., "Disraeli and the Millstones," *Journal of British Studies,* Vol. V, No. 1, pp. 122-39. 世論の動向については、Shaw, A. G. L., "British Attitudes to the Colonies, 1820-50", *Journal of British Studies,* Vol. IX, pp. 71-95. 参照。

(31) Eldridge, C. C., *Victorian Imperialism* (London, Hodderz Stoughton, 1978), Part IV.

(32) 大衆レベルから支配層に至るまで帝国主義的な感情が覆いつくした頂点は、一八九七年の「女王在位六〇年式典」であり、それを最も良く表現しているものがキップリング(Rudyard Kipling)の詩「白人の責務」やテニスン(Tennyson)の愛国詩であり、ヘンティー (G, A, Henty) の海外冒険小説であった。『ザ・タイムス』『パル・マル・ガゼット』『デイリー・メール』などの高紙紙は、より洗練された言葉で帝国の力、栄光、至高性をたたえたし、下層の三流紙は露骨な人種主義と排外主義を唱えた。

(33) Koebner & Schmidt, *Imperialism* (註(26)) chp, VIII.

(34) Hobson, *Imperialism,* pp. 66-8〔矢内原訳書一一一一一一四頁〕

(35) ハンス・フォン・ビューローは、「帝国主義」という言葉は、イギリス・フランス・ロシアなど植民地領有国が、「実際の動機や願望を覆い隠すために用いている立派に聞こえる言葉にすぎず、それを用いることによって自己を美化しているもの」と記している。Kiernan, V. G., *Marxism and Imperialism* (London, Edward Arnold, 1974) p. 1. に引用。

(36) Wehler, Hans-Ulrich, "Bismarck's Imperialism 1862-1890", *Past & Present*, No. 48, pp. 119-155.

(37) ヒルファディング〔岡崎次郎訳〕『金融資本論』上、下（岩波文庫　一九八二年）。

(38) ヒルファディング『金融資本論』下四一七―四三〇頁。

(39) ヒルファディング『金融資本論』下一〇七―一一四頁。

(40) 「ヨーロッパにおける革命的社会民主主義派の任務」（一九一四年八月二四日）及び「ヨーロッパ戦争と国際社会主義派」（同年八―九月）には、海外植民地への言及はない。そして、「戦争とロシア社会民主党」（一九一四年九月二八日以前執筆）にようやく海外植民地が登場し、「イギリスとフランスのブルジョアジーの闘争目的は、ドイツの植民地を奪い取り、経済的にめざましくもより急速に発展している、との競争国を没落させることである。」という認識が現われる。『レーニン全集』二一巻三―二二頁。引用は同書一四頁。

(41) レーニン『帝国主義』〔和田訳〕三六三頁。

(42) Langer William L., "A Critique of Imperialism," *Foreign Affairs* Vol. XLV. No. 1, (October, 1935) p. 102. Langer, William L., *Explorations in Crisis : Papers on International History* (Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1969) に再録されたものから引用　p. 167)

(43) Taylor, *Englishmen and others*, p. 80.（註(5)）

(44) ルカーチ・G〔渡辺寛訳〕『レーニン論』（青木文庫　一九六五年）五一―二頁。

(45) *Encyclopedia of the Social, Science* 1935 Vol. XV, "Ulyanov" by Harold Laski p. 142.

(46) Veblen, T., "Book Review : Imperialisim : A Study by J. A. Hobson", *Journal of Political Economy*, Vol. II, No. 2, p. 314.

(47) Hobson, *Imperialism*, p. v〔矢内原訳上七頁〕

(48) Hobson, J. A., *War in South Africa* (London, Nisbet, 1900), Hobson, J, A., *The Psychology of Jingoism* (London,

Grant Richards, 1901).

(49) Hobson, *Imperialism*, p. vi〔矢内原訳上八頁〕

(50) Hobson, *Imperialism*, partII. chp. II〔矢内原訳下第二章〕

(51) Hobson, *Imperialism*, pp. v—vi〔矢内原訳上八頁〕

(52) ホブスン『異端の経済学者の告白　ホブスン自伝』(註(19)) 七六頁。(Hobson *Confessions* (1976 edition p. 84.))

(53)『レーニン全集』三九巻・七三七頁。

(54) レーニン『帝国主義』〔和田訳〕二八七頁。

(55)「帝国主義ノートγ」の中の「著書《資本主義の最高段階としての帝国主義》のプラン」の冒頭にすでに「検閲のために」という文字が見える。レーニンの執筆当時、ブハーリンの一九一五年の著書『帝国主義と世界経済』は検閲のために出版に至っておらず、レーニンは検閲を強く意識していた。『レーニン全集』三九巻一九六—二一一頁。

(56) スイスにおけるレーニンの活動については Senn, Alfred Erich, *The Russian Revolution in Switzerland, 1914-1917* (Madison, The University of Wisconsin Press, 1971) に詳しい。

(57) トロツキー・L〔栗田勇ら訳〕『わが生涯』(1)　(現代思潮社　一九六〇年) 四五六頁。

(58) Senn, *Russian Revolution in Switzerland*, (註(56)) pp. 144, 163-4, 206-218.

(59)「一九〇五年の革命についての講演」『レーニン全集』二三巻二七七頁。

(60) 和田春樹編『レーニン』(平凡社　一九七七年) 三四—五頁、一三二—三頁参照。

(61)『レーニン全集』二巻一一一—二六四頁。このような付置付けについては Weeks, *Capital* and Exploitation. (註(1)) p. 158, footnote 12 より示唆を受けた。

(62) クループスカヤ〔内海周平訳〕『レーニンの思い出』下（青木文庫　一九六〇年）一〇〇頁。

(63) クループスカヤ『レーニンの思い出』下一〇九頁。